

花博の理念を継承した大阪らしいまちづくりを進めよう

(株) 総合計画機構 代表取締役
(社) ランドスケープコンサルタンツ協会 理事
糸谷正俊

1990年春、国際花と緑の博覧会（花博）が鶴見緑地で開会しました。開期中 2,300万人余の入場者が訪れ、多くの成果を生んだとされる花博。以来15年、さまざまな課題を抱える大阪のまちづくりに、今こそ花博の基本理念を活かした都市緑化の取り組みが求められています。

1. 地球環境時代の私たちの生き方を提起した花博

世界各国が一堂に会して、各国の物産、技術、文化を展示し、様々な情報交流を行う催しである国際博覧会は、1851年ロンドンのハイドパークで開かれた万国博覧会を起源としています。この万博は、18世紀からヨーロッパの技術先進国で行われていた産業展示会的な催しをはじめ国際的な次元で開催したものであり、博覧会の性格も産業振興にとどまらず、技術の見本市、知識交換の場、大衆への啓蒙と教育の場という新しい役割を付与したものでした。

この万博では、ヨーロッパやアメリカなど約40の国の参加をはじめ、600万人の入場者があるなど成功裡に終わりますが、開催背景にはイギリスの近代工業社会の進展と、新世界やインドから吸収した多くの富があったといわれています。

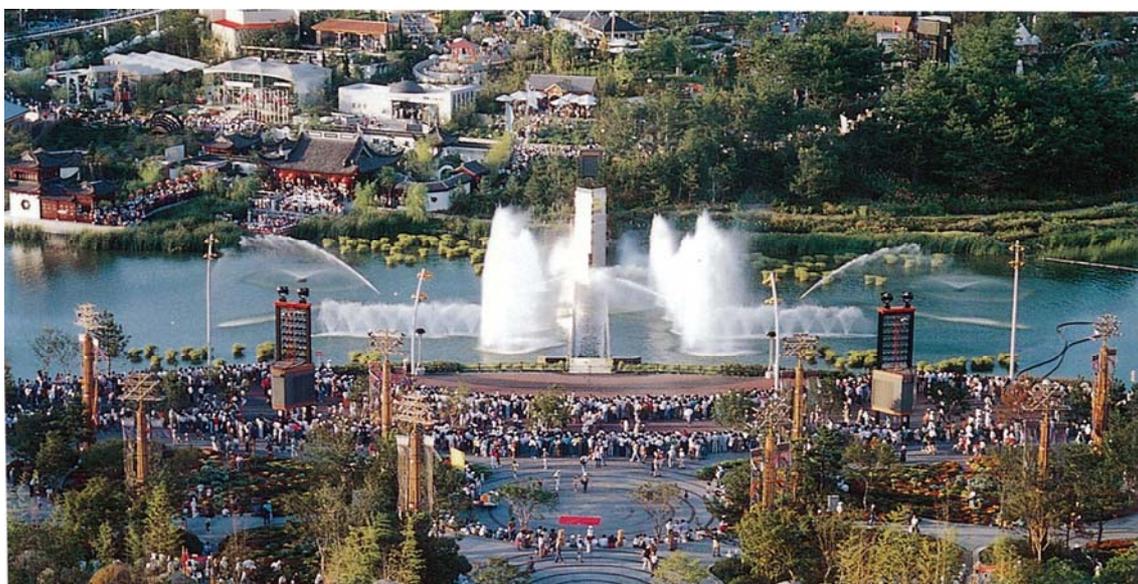
ロンドン博以後、先進国は競うように万国博覧会を開催し、ニューヨーク、パリ、ウィーンなどで次々に行われていきます。近代化に遅れた日本も、1867年のパリ博には早くも江戸幕府のほか、薩摩藩、佐賀藩が個別に出品し、1873年のウィーン博には明治政府が出席するなど積極的に参加して、日本を国際的に知らしめるとともに海外文明の吸収に努める機会としてきました。

そして1928年には国際博覧会条約が結ばれ、この条約に基づく国際博として日本では、東京で1940年に開催する計画であった万博は戦争により断念したものの、アジアではじめての万博が1970年に大阪で開かれ、その後沖縄海洋博（1975）、筑波科学技術博（1985）と続き、したがって1990年の国際花と緑の博覧会は、日本では4番目の国際博ということになります。

19世紀半ばから20世紀末に至る150年の間には、国際博覧会の位置づけもだんだんと変わってきました。技術文明の交流博覧会の性格が強かった19世紀のヨーロッパ型国際博は、20世紀になると国の威信をかけた近代化戦争の様相を呈し、ヨーロッパとアメ

リカが互いに国力と最先端技術を競い合う場と化します。しかし、二度の世界大戦を経て後は、ヒューマニズム（1958、ブリュッセル）、宇宙時代の人類（1962、シアトル）、理解と平和（1964～65、ニューヨーク）、人間とその世界（1967、モントリオール）という各博覧会テーマが示すように、人類と世界のあり方を展示し情報提供する、人間博、情報博へと変化してきます。

20世紀後半に行われた日本の国際博も、「人類の進歩と調和」をテーマとした大阪万博をはじめ、この流れの中にすべて位置づけられるものです。そして世紀末に行われた花博は、20世紀の国際博を総括するとともに、「自然と人間の共生」というテーマのもとに地球環境時代の人類という新しい視点を提供した博覧会として、新世紀への橋渡しを見事に果たしました。この視点は、今年愛知県で行われる万博（愛・地球博）のテーマ「自然の叡智」にも繋がっています。



写真① 花博の中心部—手前花栈敷、中央いのちの海、向こう国際庭園

2. ちまた（巷）の中に生命讃歌を表現した花博会場

花博の基本理念は、すばらしい未来の創造に向けて今何をなすべきかという問題提起を、私たちに美しく格調高い言葉で投げかけました。語られたのは、それこそ地球環境問題から生命科学の問題、さらには都市文明・都市生活から人としての暮らしの処し方まで幅広く、重要な課題が溢れています。

この理念の継承と実現については、国際花と緑の博覧会記念協会が中心となって現在もさまざまな事業が継続され、現代社会の発展に役立てられています。

私は当時、花博会場計画立案の責任者の一人でした。そこで、会場計画を策定した立場から花博の理念を検証するとともに、21世紀の都市づくり、大阪のまちづくりに活かす

べき事柄についての私の考えをお示しいと思います。

前項で国際博覧会の歴史を少し振り返りましたが、会場づくりの面でも、国際博は次々と新しい技法を取り入れて、世界の都市開発に大きな貢献をしています。その中で忘れてはならないのがランドスケープアーキテクト（造園家）の役割です。

第1回万博のロンドン、ハイドパークでは、会場建設により公園内のニレの木が失われることから反対運動が起き、会場整備が行き

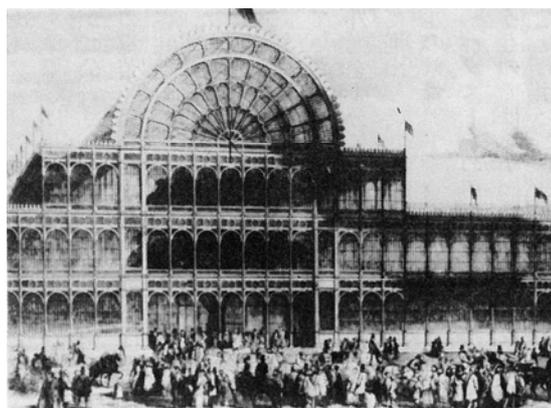
づまるという事件がありました。そこで登場したのがランドスケープアーキテクトのジョーセフ・パクストン。彼は、公園の現状を活かしてニレの大木を切らずに屋内にそのまま取り入れた温室パビリオンを創り上げ、脚光を浴びます。この建物はクリスタルパレス（水晶宮）と呼ばれ、万博のシンボルとなり、また以後の公共施設整備の手本ともなりました。その後の会場計画でも、1893年シカゴのジャクソン公園で開かれた「世界コロンブス博覧会」ではアメリカのランドスケープアーキテクトの祖といわれるフレデリック・ロー・オルムステッドが主導し、会場計画の思想と技術は、自然を活用した都市計画、都市美運動のさきがけとなりました。

日本では、博覧会の会場計画は建築や都市計画分野の人々が担当することが多いのですが、花博は日本で初めてランドスケープアーキテクトが手がけた会場となりました。会場の雰囲気も、従来の大規模造成によって新たに近代的で合理的な都市空間を創り出すものとは異なり、自然の摂理に基づき、丘、野原、池、街が織りなす、花と緑と水にあふれた、美しくてどこかなつかしい風景が楽しめる田園のおもむきに仕上がりました。この会場づくりのコンセプトは、その後の淡路花博や浜名湖花博にも基本的に受け継がれ、さらにいろいろな都市においても、花と緑を取り込んだまちづくりのイメージを示したことにより、都市緑化や園芸が盛んになるきっかけとなったのです。

花博の基本理念は、都市の内部に花と緑のふるさとを創造する必要性を指摘し、このため、自然を愛し、自然を畏敬し、生命を祭る場所と仕組みを、ちまたの中にこそつくらねばならない、と謳っています。

この理念を受けて私たちランドスケープアーキテクトが花博会場で表現したのは、高密度な都市空間の中にも生き物と共存できる環境を実現することであり、まさに21世紀に求められる都市像を人々の前に具体的に示すことだったのです。

花博会場となった大阪では、花博の理念をまちづくりに活かす取り組みが続けられていますが、その取り組みの重要性は増すことはあっても、いささかも減じるものではありません。



写真②パクストン設計の水晶宮

（改訂版万国博覧会 P49）

3. 花博をベースに大阪の花と緑のまちづくりを考える

それでは大阪の町は、花博以降花と緑が増えたのか、と聞かれるとはたと困ります。

全国的には生花や花苗・植木を提供する園芸店が増え、イングリッシュガーデンがブームになるなど、花博の成果があったと言われてはいますが、大阪の都心や住宅地で具体的な成果が見られるのはまだまだ先のことのようにです。

大阪で花と緑のまちづくりを進めていくには、大阪という都市の成り立ち、歴史性を踏まえる必要があります。

大阪の町の地形は谷町筋という小さな細長い台地を除くと、ほとんどが草地でしかなかった沖積平野。そこを埋め立てて都市が拡大したのですから、もともと台地や段丘が多くて、また歴史的にも大名庭園など緑のストックに恵まれている東京や、東山、北山、西山の三山に囲まれ市街地内にも神社仏閣の緑の蓄積がある京都、六甲を抱き邸宅やニュータウンの新しい緑の多い神戸などに比べ、緑の量を比較してもこれは対抗するのが無理というものです。

緑の量ではなく、緑の質、緑の文化という点から、大阪の都市緑化のあり方を捉えることが大切です。以下、三つのこれからのあり方を提起します。

<第1 市民皆が愛する、質の高い花と緑の文化拠点をつくる>

ニューヨークもビジネスの街であり、映画やテレビで見る限り、中心地は活気に溢れているものの緑豊かな雰囲気はあまり感じられません。しかし、映画「オータム・イン・ニューヨーク」では、恋人同士が紅葉した公園で語り合いながら散策するシーンがすてきです。もちろんこのデートの場所は、かのオルムステッドが設計したセントラルパーク、市民に心から愛され、市民の心のふるさと、緑の文化拠点となっている公園です。

大阪にもセントラルパークに匹敵する大阪城公園や中之島公園それに長居公園などがあります。でも市民の愛し方は、セントラルパークには及ばない。大阪城公園などを花と緑の文化拠点として、市民のふるさととして、もっと愛されるように質を高める必要があります。その際、花博で実証されたランドスケープアーキテクトのプランニング技術、デザイン力が大いに役立つものと思います。また、来年春に大阪城公園を主会場として予定されている「全国都市緑化おおさかフェア」の開催と、これも来年5月に市内で行われる世界バラ会議が、拠点づくりの一つの契機になるものとして期待されます。

<第2 住民と企業が、自ら花と緑のまちづくりを進める>

もともと大阪は、御上に頼らず自らまちづくりに取り組むという歴史を持った土地柄です。江戸時代、小規模な町奉行所はありましたが、町の自治は住民組織に任されていました。

た。近代では大阪城の復元、戦後の大阪城公園の緑化が市民からの寄付でまかなわれています。地下鉄御堂筋線も、地下鉄沿線の立地企業の資金的協力があって実現しました。

自分たちの町は自分たちの手で良くする、という大阪人の誇り、気概は、独特の大阪文化の支えてきたものです。花と緑のまちづくりも、御上のご意向ではなく、自分たちのまちづくりの一環として、自立的に取り組むことが一番です。

幸い花博以降、市内各区には緑化リーダー、グリーンコーディネーターと呼ばれる花緑のプロフェッショナルの方々がおいでになり、活躍の場を求められています。また、先駆的な屋上緑化（なんばパークスなど）や敷地緑化（OBPなど）等の企業の緑化も盛んです。さらに大阪および関西圏には、たくさんのランドスケープアーキテクトや緑化関連企業が活動しています。

こうした民間の人的資源やノウハウを活かし、自主的な花と緑のまちづくりを推進することが大阪らしい都市緑化を実現することになります。

<第3 小さな花と緑を慈しみ、笑顔の広がる町内にしていく>

花博会場計画にかかわっていた頃、こんな話を聞きました。国際園芸家協会（AIPH）の偉い方々が博覧会準備状況の視察のため大阪にお見えになった時、市内の小さな住宅、路地に花や緑がきめ細かく育てられていることに非常に感心した、というのです。ちっぽけな都市空間でも、創意工夫で美しい花壇になる、というわけです。この路地裏園芸やベランダ花壇は、高密度に暮らす大阪ならではの緑化手法。拠点づくりとともに、身の回りの小さなところから花と緑を育てていくこの伝統技術を深め、市内各地に広げていくことが重要です。

帝塚山などの一部を除き、都市計画でいう低層専用住宅地域を持たない大阪で、郊外ニュータウンのような緑の多い住宅緑化は不可能です。

小さな花と緑を路地、玄関口、窓際、ベランダなどに持ち込み、できればご近所で相談しながら通りすべてが美しく調和のとれたデザインとなるように工夫し、町全体の緑化につなげていく。これが花博理念で語られた、ちまたに花と緑のふるさとを生み出すための具体的な方法の一つです。

町全体を美しくするためにはどんな花や木を植えればいいのか？その育て方は？というような疑問には、緑化リーダーやグリーンコーディネーターが的確に答えてくれるはずです。及ばずながらランドスケープアーキテクトの職能団体である（社）ランドスケープコンサルタンツ協会のメンバーも、このような手作りのまちづくりをお手伝いしたいと考えています。

都市を緑化し、緑を増やすことはすばらしいことですが、大阪には大阪のやり方があると分かっていただけでしょうか。小さな花と緑を慈しみ、そのこぼれ花や実生をご近所で分けて、どんどん増やしていく。その過程で、ご近所付き合いが密になり、町にコミュニケーションが広がり、笑顔が増えていく。安全で安心できる住みよい美しい町が育てら

れていく。これが本来の花と緑のまちづくりの目的であり、大阪的な都市緑化、花緑文化の目標である、と考える次第です。

皆さん、今日からでも花博の地、大阪らしい花と緑のまちづくりに取り組もうではありませんか。

参照 NHK ブックス 477 「改訂版万国博覧会」 吉田光邦

平凡社「世界大百科事典」博覧会の項

「花博の会場計画とデザイン」平成3年9月（社）ランドスケープコンサルタンツ協会編